

ちゅうおう

2025
1/1

デジタル版も
こちらで
ご覧になれます



Multilingual

葛屋重三郎



特集

江戸のメディア王 葛屋重三郎 をたどる



令和7年1月放送開始の、大河ドラマ「べらぼう」葛屋重三郎（葛屋）は中央区にゆかりのある人物です。本特集では、出版者としての葛屋の手腕や、区内の関連スポットなどを紹介します。葛屋のことを知り、ゆかりの地を巡ってみませんか。

〈出典〉国立国会図書館デジタル
コレクション収録(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2533327/1/32>)を加工して作成

2面・3面に続きます

新年のご挨拶



中央区長

やまもと たいと

山本 泰人

新年明けましておめでとうございます。

区民の皆さまにおかれましては、令和7年の新春を晴々しい気持ちでお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年も、「大江戸まつり盆おどり大会」や「観光商業まつり」、「まるごとミュージアム」などさまざまなイベントに多くの方にご参加いただきました。さらに、昨年12月に開催した第1回「晴海まつり」も大盛況のうちに終えることができ、区内が活気にぎわいに溢れていることを区長として大変うれしく感じております。

一方で、能登半島地震の発生や、南海トラフ地震臨時情報の発令などを受け、防災対策には終わりが無い

ことを改めて痛感いたしました。昨年は「地域防災計画」の修正に加え、新たな備蓄物資などの配備、各家庭への防災用品カタログギフト配布を通じた家庭内備蓄の促進など、地域防災力の一層の強化や防災意識のさらなる向上を図るための取り組みを機動的に進めてまいりました。また、「プレディプラス」事業の実施、「ふくしの総合相談窓口」開設などの子育て・福祉サービスの充実や物価高騰対策など、区民の皆さまが日々直面している課題に対し適切な対策を講じ、暮らしを守る取り組みを推進してまいりました。区民の皆さまには、各施策にご理解・ご協力をいただき心から感謝申し上げます。

本区の定住人口は、なお力強いペースで増加しており、令和9年度中には20万人に達する見通しです。こうした中、首都高速道路日本橋区間の地下化、築地川アメニティ整備構想、東京高速道路(KK線)の活用による緑のプロムナード化、築地市場跡地の再開発など、将来に向けた都市基盤整備が進行しています。引き続き関係機関や事業者、地元との調整を進め、区内で進行中のさまざまな都市基盤整備の機会を捉えて本区の魅力を一層高めてまいります。また、環境施策としては、再生可能エネルギーの利用拡大などを目的に

福島県大熊町と締結した連携協定に基づく住民交流なども始まっており、今後も区民・事業者・区の連携、地域間連携を図りながら脱炭素社会の実現に向けて取り組んでまいります。

本年1月から放送される大河ドラマでは、江戸随一の出版人、葛屋重三郎の生涯が描かれます。日本橋の通油町（現在の日本橋大伝馬町）に開いた書店「耕書堂」を活動拠点として、山東京伝、喜多川歌麿、東洲斎写楽などの作品を次々と出版した本区にゆかりのある人物です。令和9年3月の区制80周年に向けてシティプロモーションの取り組みを推進している中、区民の皆さまが地域の歴史文化資源の魅力を発掘・発信する契機となりましたら大変喜ばしく思います。

区といたしましては、区民の皆さまが地域への誇りや愛着心を持ち、より一層暮らしやすいまち—中央区セントラルパーク構想—を目指してさまざまな施策を展開し、本区の将来像「輝く未来へ橋をかける一人が集まる粋なまち」の実現に向け全力を尽くしてまいりますので、皆さまの一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新しい年が皆さまにとって幸多き一年となりますよう心から祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。



「姿見七人化粧・びん直し」
喜多川歌麿・画 寛政4～5年(1792～93年)*推定
〈出典〉ColBase(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-10569-1847)をもとに加工

広告的な発想があったんですね 蔦重には人を集めてくる



鈴木俊幸氏

中央大学文学部教授。中央大学文学部、同大学大学院を経て現職。狂歌・戯作研究の一環として蔦屋重三郎の研究を始め、現在は江戸時代から明治時代前期までを対象として、書籍文化研究を広く行っている。主著に『蔦屋重三郎』（若草書房）、後に増補し『新版 蔦屋重三郎』（平凡社）他多数。

蔦屋重三郎 研究の 第一人者 鈴木俊幸氏にお話を 伺いました

Q 後世の人々から「江戸のメディア王」と呼ばれる蔦屋重三郎（以下、蔦重）。彼が活躍した江戸は、当時どんなまちだったのですか？

18世紀後半ごろの江戸は、長年の上方文化の影響・支配から脱却し、独自の文化圏を構築しつつありました。その一つは食。野田のしょうゆといった調味料や近郊野菜、江戸湾の豊富な魚などの自前の食材が安定的に供給され、調理する技術が生まれました。もう一つは酒。伏見や灘から下ってくるものに匹敵するような良い酒を醸す技術が確立。食べ物と飲み物が安定してくると、「江戸っていいな」と思うんですね。

それから、歌舞伎のスター誕生、江戸独自の荒事が確立した他、祭りなどの行事も盛んでした。学芸ではそらいがく 徂徠学。やなぎさわよしやす 柳沢吉保に仕えた儒学者のおきやう 荻生徂徠が提唱した学問が全国を席卷していく。また、浮世絵がフルカラーの印刷になって錦絵と称され、一番の江戸土産となりました。

そこで吹いた風のもう一つが経済。田沼意次の経済施策により、江戸のまちが経済的にも活性化し、どんどん上向いていきました。そのころ、武家の間でも和歌や漢詩などの文芸が流行し始め、武家の文化がまちの文化と融合。けさく 戯作なども出てきて、おしゃれなもの、センスの良いものが生み出されてくる。他国に誇れる江戸の文化が花開き、江戸っ子としての自信と誇りに満ちた、まさに“アゲアゲ”の時代といえたのではないのでしょうか。

Q 生誕の地、吉原で蔦重が手掛けた最初の仕事について教えてください

蔦重が生まれたのは絶頂期の江戸、吉原。寛延3年（1750年）、当時の吉原は最先端、最新流行の風が流れ、江戸の繁栄を象徴したようなまちでした。「かっこよく遊びたい」という人々が集まり、いろいろな見方はあるけれど「おしゃれなまち」として、ぜいたくな建築や調度品、一流の食べ物と酒、芸事を楽しむ人々でにぎわっていた。蔦重の感性は、新しいものに絶えずさらされている吉原のまちのこうした雰囲気背景に磨かれていったのです。

安永（1772年～）のころになると、吉原の経済・文化のけん引役は大名から魚河岸の旦那やうしろ 札差など裕福な町人へ移行。そうした中、遊びのために散財できない人たちは次第に吉原から離れていきました。吉原に人の目を向け集客を図るために、華やかな行事を催し、江戸市中に魅力をアピール・発信していこうという中で、吉原で本屋を始めた蔦重は、その仕事に関与していった。彼の広告的発想センスと吉原側の思惑がうまい具合に合致したのか、蔦重自身が吉原を動かしたのかは分かりませんが、彼の出版業は吉原の洗練したイメージを売り込むようなすりもの 摺物を手掛けるところから始まりました。その後、うろこがた 鱗形屋孫兵衛が出版を継続できなくなった時、吉原から初めて出る「吉原細見（妓楼や遊女のガイドブック）」を発刊。やり手なんですね。これが大ヒットし、吉原の名物本屋として一目置かれる存在になって蔦重の名前が江戸中に響き渡っていったのです。

Q 成功をつかんだ蔦重は日本橋へ進出します。なぜこの地が選ばれたのでしょうか？

天明3年（1783年）、通油町（現在の日本橋大伝馬町）に「耕書堂」を出店した蔦重。日本橋は江戸の本屋業界の中心地。そこに店を出すのはステータスであるし、吉原から来て、ど真ん中の日本橋に出店するのはビッグニュースでした。人を集めてくる広告的な発想がそこにあったんですね。同業者も多く取引がしやすい立地で、地代は割高なるも話題性と集客力は抜群。うまく回転すれば商売には絶好の土地なんですよ。そこでも蔦重は「おしゃれな店」というブランドイメージを固めていきました。江戸狂歌が流行すると、狂歌に関する摺物や本を蔦重が独占的に出版していきます。人気狂歌師の大田南畝を店の看板に掲げ、「私の作品も大田南畝の御用達であるこの店から出したい」という雰囲気を作り出していき、ここが蔦重のうまいところ。いかに店に人を集めて買ってもらうか、営業力を高めるか、その一つの柱が出版だった、ということなんです。

Q 快進撃を続けた後、晩年にかけてどんな生涯を生きたのですか？

蔦重は、地方の農村部での知的欲求の高まりをいち早く察知して、寛政3年（1791年）には江戸の書物問屋に加入し、江戸以外のマーケットを開拓。山東京伝の作品や、江戸発の地本を地方へ向けて流通するアイデアをひらめきます。寛政期の厳しい取り締まりにより出版規制を受けるなど不遇が重なりましたが、逆境を逆手に躍進し、歌麿や写楽ら人気絵師たちをプロデュースするなど出版界に君臨し続けました。

その後の寛政9年（1797年）、蔦重は病により享年48歳でその生涯を終えています。

現代の中央区のビル群に18世紀当時の江戸の面影をみるのは難しいですが、蔦重が活躍した頃を想像しながらまちを散策するのもよいでしょう。



「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」

東洲斎写楽・画 寛政6年(1794年)
〈出典〉ColBase(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-10569-471?locale=ja)をもとに加工

薦重の時代に思いをはせながら、
歩いてみるのもオススメです♪



ニ 広報モデルの方にご協力いただきましたニ

薦屋重三郎 耕書堂跡

天明3年（1783年）に薦重が日本橋へ進出する際に「耕書堂」出店の地として選んだのが通油町（現在の町名：日本橋大伝馬町）です。現在その面影はなく、旧日光街道（大伝馬本町通り）沿いに案内板が設置されるのみとなっています。〈所在地：日本橋大伝馬町13-8先〉



日本橋・八丁堀・勝どき…

薦重ゆかりの地を巡る

山東京伝 ゆかりの地

薦重と長年の間、深い交流関係にあった山東京伝。13歳頃に京橋へ転居後、浮世絵の技法を北尾重政に学び、黄表紙の画工・作者として活動しました。通称の「伝蔵」と「京橋」から文字をとり「京伝」の号を名乗りました。ちなみに「山東」とは江戸城紅葉山の東の居住地を意味します。

東洲斎写楽 の説明板

出自不明、活動期間10カ月の「謎の絵師」写楽。後年の考証から江戸八丁堀に住む徳島藩の能役者の斎藤十郎兵衛だったという説があります。当時の八丁堀は与力同心の屋敷地でした。亀島橋の橋詰には写楽に関する案内板が設置されています。〈所在地：八丁堀2-30-18先〉



十返舎一九の墓碑

江戸に出て来た一九の居候先が、薦重の拠点日本橋でした。彼の仕事を手伝いながら作品を次々に発表し続けました。勝どきにある東陽院の門前には、一九に関する石碑や文化財説明板があります。〈所在地：勝どき4-12-9〉



「江戸のメディア王」薦重ゆかりの作家たち

薦屋重三郎 版元・耕書堂店主

寛延3年（1750年）江戸の新吉原で生まれる。貸本・小売り主体の本屋を開業。吉原細見の自版に成功した後、天明3年（1783年）通油町（現在の日本橋大伝馬町）に進出して地本問屋「耕書堂」を立ち上げる。洒落本・黄表紙・浮世絵などの作家の発掘・育成とともに、人気作品の出版・販売の才に長け江戸の出版界の中心人物に昇りつめた。寛政9年（1797年）没。

東洲斎写楽（生没年不詳） 絵師

写楽が描いた作品は全て薦重の元から版行。寛政6年（1794年）の10カ月間で約140点もの浮世絵を制作した謎の多い絵師。作品の大半は歌舞伎俳優の大きな顔や演技などの個性を強調して描いた「大首絵」と呼ばれる役者絵で、特に迫力ある初期の作品群の評価が高い。

十返舎一九（1765～1831） 戯作者・絵師

駿河国（現在の静岡県）で浄瑠璃を執筆していた一九は、30歳頃に薦重の元で居候（通油町の「耕書堂」）生活を開始。その文才と絵心を認められて黄表紙を出版して売れっ子作家となった。享和2年（1802年）の「東海道中膝栗毛」が大ヒットし、以後21年間にわたって続編を刊行。

喜多川歌麿（1753～1806） 絵師

かつて薦重の「耕書堂」に身を寄せ、狂歌絵本の作画を担っていた歌麿。薦重の発案で美人画に大首絵の画法を採用した錦絵「婦女人相十品」を発表すると、作品は爆発的な人気を博した。歌麿は写楽とともに浮世絵師としての才能を薦重に見い出されて大成した絵師の1人。

山東京伝（1761～1816） 戯作者・絵師

深川出身。養父の転居先だった京橋で浮世絵師・戯作者としての活動を開始。同時に吉原で薦重との交流を重ねる。黄表紙・合巻・読本・滑稽本など多彩なジャンルで活躍。寛政の改革による出版統制を受けて彼が手掛けた洒落本が風紀を乱すものとして摘発の対象にもなった。京伝は現在の銀座一丁目で煙管・紙たばこ入れの店を営んだ。

歌麿・写楽を発掘した仕掛け人